

きらら浮世伝

作・横内謙介

葛屋重三郎（重三）

恋川春町

喜多川歌麿（勇助）

太田南畝

山東京伝（伝蔵）

葛飾北斎（鉄蔵）

滝沢馬琴（左七）

十返舎一九（与七）

初鹿野河内守信興

西村屋 与八郎

彫り師の親方 彫達

摺り師の親方 摺松

中山富三郎

佐野川市松

女衞の六

遊女 お篠

遊女 お菊

遊女 玉虫

遊女 舟虫

黒衣たち

■第一幕

プロローグ

黒衣姿の版画職人（彫師、摺師たち）が一心に浮世絵作りをしている。

やがて背景に浮かび上がる一枚の浮世絵。

美しい日本の風土を描いた絵……

※この舞台では、黒衣たちが、名もなき江戸の庶民、職人たちを何役も兼ねて演じる。

新吉原大門。

重三、二十四歳の春。

黒塗りの大門に五分咲きの桜。

一夜の夢を見た男たちが、明け六ツの鐘に起されて、大門を後にする吉原の後朝（きぬぎぬ）。

春町がまだ眠たそうな目をこすりながら大門をくぐって来る。門の前で立ち止まって欠伸などしていると、ちょうど入れ代るように廓内に入ろうとした重三（じゅうざ）がその姿を見つけて、

重三 春町先生、おはようございます。今、お帰りですか。

春町 そちらはこれから？

重三 はい。

春町 遊女を買いに。

重三 商いですよ。新しい洒落本が入ったんで、早いうちにお得意さんを回っておこうと思ひまして。

春町 こんな朝っぱらから。

重三 はい、誰よりも、早くつてのが私の信条なんです。

重三はたくさんのお金を抱えている。春町はようやく気づいて、

春町 おお、あなたはこの先の貸し本屋さんだ……

重三 葛屋です。先生の本にはいつもお世話になっています。

春町 いやいや、こちらこそ。

重三 先生のお書きになるものは、遊女たちに人気があるから。大変なもので、貸して本なのに戻って来たためしがない。

春町 信じられないなア。私はこの吉原に通い始めて、もうずいぶんになるけど、花魁にもてたことなんか一度もないよ。今朝だって私の相方は、布団から出ようとしねえで。さよなら、だとよ。しやらくせえ。そりゃひどいな。どこの店です？

重三 京町二丁目の三軒目の……

春町 玉屋はダメです。あそこの子たちは皆んな本を読まないんだ。たまに眺めて、あぶな絵ぐらいでさ。それより春町先生なら、揚屋町の伊勢屋。あそこのお鶴ちゃんあたりだったら、本が好きだから戯作者の恋川春町先生が来てくれたなんて言ったら、しがみついて離しちゃうくれ

なくなりますよ。もう少し丸顔がお好みなら、江戸町角屋の牡丹さん。この人は年はいってるけど情が細い。細おもてをこそ所望なら……

あなた、若いのにずい分遊んでるねエ。

いやだな、先生。俺はこうやって本担いでいろんな店回ってますから、自然とどこにどういう子がいるか知ることになったただけでございますね……

春町 そりやずるいなア、蔦屋さん。

重三 は。

春町 どこにどういう子がいるかって、そんな大切な知識を独り占めにしちゃいけません。是非教えて頂きたい。どこにどういう子がいるか、よく知らないばかりに、私は今までなんとも辛い目にあってきたんだから。

重三 そんじゃすぐに、一覧表にしてお届けしましょう。

春町 それ、私、買わして頂きます。いくらでも出しましょう。

重三 (驚き) えっ、買って頂けるんですか！

二人の会話がはずむ間に、旅姿の男(女衞の六)が、同じように汚い旅姿の少女(お篠)を連れてやってくる。

女衞の六 ほら、よく見ておきな。年季が明けるまでは、もう二度とこの門の外には出れねエんだからな。

少女は黙って今来た道を睨み付ける。

女衞の六 あそこに見えるのが見返り柳だ。「もてた奴ばかり見返る柳なり」なんて言っつてな。お前さんも、客に見返ってもらえるような立派な花魁になんだぞ。

少女はただじっと遠くを見ている。

女衞の六 まったく愛嬌のねエ娘だな。行くぞ。

女衞の六は娘の手を握り、郭内に連れて入ろうとする。しかし娘は六の手に噛みついて逃げようとする。慌てて捕まえ、杖で娘を殴る六。

あまりの惨さに止めに入る、重三と春町。

春町 オイオイ、酷いね！

重三 ちよつと、おやめくくださいまし。

女衞の六 関係ねえだろ！ どいてくれ！

と連れて行きかける。

重三 お待ち下さい！ これを……これを……！

重三は一冊の美しい絵草紙を娘に持たせてやる。

娘 ……

娘は重三に貰った本を抱いて門の内に。

春町 吉原の朝に、売られてきた娘か……一覽表、待ってるよ……おい、葛屋さん？

重三は刹那、幻想を見る。

門が開くとそこには美しい絵草紙を一心に眺めている娘の姿。その娘の姿が、花魁の姿（お篠）に変わり、絵草紙を大切に抱く。

5

春町 ……今の娘、可愛い顔してたな。花魁に、心取られて間抜け顔、そ

ういう私は財布を盗られた……って。しまった！ 財布盗られた！

重三 （我に返り）えっ！ どこです！

春町 あの店だあ！

二人は大騒ぎで財布を探しに。

人が行き交い始める。

吉原が目を見ました。

二年後。

吉原の、ある茶屋の座敷。

勇助が一人、不安気に座っている。

そこに大手版元の西村屋与八郎がやって来て、

西村屋 いらしてましたか、勇助さん。ちゃんと絵を持って来ましたか。

勇助 (慌てて風呂敷包みを出して) は、はい。

西村屋 (勇助の耳元で) まあ、変わり者だけど、偉いお役人だし、会って
いて損のない人だから……

勇助 は、はい。

西村屋 いかにあなたの腕がいいかってことは私がよく言つといたから。

そこに旗本の初鹿野がやって来る。

西村屋 これは初鹿野様。先達ては誠に有難う存じました。

初鹿野 何、たいしたことじゃありません。

西村屋 危ないところをお助け頂きました……

初鹿野 いくら西村屋が御法度の春画を出したからって、天下泰平の世の中
に、あんなに騒ぎ立てる方がおかしいんです。

西村屋は懐から金子を取り出し献上する。

西村屋 些少ではございますが、お礼の印でございます。

初鹿野 そんなに売れましたか。

西村屋 お陰さまで。

「大田南畝先生がお見えです」

外で声がして、大田南畝が来る。

それを取り巻くように男芸者や遊女たちも賑やかに現われて、

南畝 本日はお招き頂きまして、有難うございます。

初鹿野 これはこれは蜀山人先生。よく来てくれました。

初鹿野は西村屋が差し出した金子を突然、座敷にバラ撒いて、

初鹿野 今日は何やかにやろう。

芸者や男衆たちは金子を奪い合い、急に座敷が活気づく。

南畝 たいした御趣向でございませぬ。

初鹿野 いやなに、西村屋から賄賂が届いたものですからね。

南畝 (笑って) 賄賂が！ それは結構。

西村屋 (冷や汗をかきつつ) いや、まったく。は、は、は……

初鹿野 それで、例の有望な新人絵師というのは？

西村屋 お連れ申しております。勇助さん！

勇助 は、はい。

勇助が慌てて絵を差し出すと、初鹿野らはそれを回し見る。

勇助 鳥山石燕の弟子で豊章と申します。

西村屋 石燕門下一番の期待の新鋭でございませぬ。

初鹿野 どうです南畝先生。

南畝 美人画か……なるほど、いい腕でございませぬよ。

初鹿野 天下の目利き、大田南畝がそう言うのだから、これは本物だ。倦むことなく修業に励むがよからう。

そして初鹿野はその前に金子を置く。

西村屋 (小声で) 有難く頂いて……

勇助 は、はい。

西村屋 それにしても初鹿野様は粋なお方でございます。こんなことは昨日、今日、吉原に通い始めた半可通には出来る遊びじゃございませぬ。

初鹿野 世辞はよせ。このワシも筆さえ立てば太田南畝や恋川春町のように侍など辞めて、狂歌でもひねりながら面白おかしく身過ぎ世過ぎをするところなのだが……無芸の旗本に出来るのはこれぐらいのことなのだ。どうか気楽に遊んでいってくれ。ワシはそちたちの如き、才ある者たちと共に時を過していたいのだ。

そこに春町も現われる。

春町 遅れました。春町でございませぬ。

初鹿野 待ちかねたぞ、酒上不埒。

春町 初鹿野様、蔦屋重三郎を連れて参りました。

初鹿野 そうか。

西村屋 ちよつと待って下さい。それは大門の前の貸し本屋の……

春町 貸し本はもうやってません。今は小さいながらも、本を作って商う店に育ちました。

西村屋 なんてまたあんな男を。

初鹿野 私が先生に会わせてくれと頼んだのだ。

西村屋 だってありゃ、たまたま出したつまらない刷り物が評判になったってだけの素人でございますよ。

初鹿野 (懐から細見を取り出して) これでしよう。吉原細見「一目千本」：

：

春町 初鹿野様もお持ちですか。そのつまらない刷り物を。

西村屋 ……

春町 おい、重三。

すると重三が姿を現わし、

重三 蔦屋重三郎でございます。

初鹿野 ああ、よく来てくれた。

南畝 初鹿野様は蔦屋の細見をお持ちだそうだ。

初鹿野 これはいい思いつきじゃ。吉原の遊女を草花にたとえて紹介しているんだが、これ一冊持つていればどこにどんな太夫がいるか一目瞭然なのだ。蔦屋よ、そちもなかなかの才人だ。先々は何をするつもりだ？はい、私は西村屋様のように、洒落本や草双紙、やがては錦絵まで出せるような版元になりたいと思っております。

重三 初鹿野 ちようどいい。(勇助に) どうじゃ勇助、この蔦屋に錦絵を描いてやつたら。

南畝 (勇助の絵を重三に見せながら) いい腕だろ。

重三 (絵をくい入るように見て) はい。(改めて勇助に) いい絵です。素晴らしいです。

しかし勇助は尊大な態度で軽く会釈を返すだけである。

西村屋 そりゃ素晴らしいに決ってますよ。石燕門下一番の期待の新鋭なんだから。

重三 (絵を見ながら) これを大判の一枚刷りにしたら、さぞいい錦絵が出来るでしょうねえ……

初鹿野 これで決まりじゃ。蔦屋よ、良い錦絵を作るのだぞ。
重三 はい。

すると突然、西村屋が笑い出して、

西村屋 はいって、そんな無責任な……あなた、錦絵問屋の株はお持ちか？

重三 いいえ、まだ……

西村屋 それでどうやって錦絵を出すんです？

重三 ……

西村屋 いい加減なこと言っちゃいけませんよ。株がなくちゃ、錦絵は出せない決まりでしょう。

重三 ……

初鹿野 そうか、蔦屋はまだ株を持っていないのか。

西村屋 錦絵の株は高価な上に数が限られていますから、昨日今日、始めたばかりの素人さんにはとてもとても……

初鹿野は重三にも金子を差し出す。重三は思わず躊躇するが、

初鹿野 これでは、株に足らぬな。

西村屋 ははははは！

重三 (受け取って) 滅相もございません。かたじけのうござります。

その時、「篠竹太夫お上がりです！」の声。

そこにお篠が登場する。

もう一人の遊女、お菊や男衆たちも。

西村屋 いやア、来た来た。初鹿野様、お篠さんが来ましたよ。

南畝 (細見と照らし合わせて) 五月の菖蒲草か……

お篠 京町越前屋の篠竹でありんす。

西村屋 初鹿野様は、この篠竹さんを身請けして独り占めしちまおうなんて、剛毅なことをたくらんでいらつしやるんですよ。ようようご両人！

初鹿野 今日は大切なお客人をお招きしているのだ。

お篠は勇助に酌をする。

勇助は舞い上がって、

勇助 わ、私は、鳥山石燕の許で絵の修業をしている豊章と申します。私、

今はまだ修業の身ですが、そのうちに浮世絵師として必ず世に出るつもりです！

勇助は興奮して酒などこぼしてしまふ。

西村屋 ああ、見ちゃいられないなア。これから美人画で世に打って出ようと言ふ浮世絵師が、美人の前で舞い上がって……

初鹿野 (笑い) 良いではないか、初々しいぞ。修業が忙しくて遊んでる暇なんかなかったのだろう。

南畝 それに比べて蔦屋の落ち着いてることと言ったら。

重三はまだ勇助の絵を眺めつつ、手酌で飲み続けているが、

重三 はい、私は遊んでる暇がいっぱいあったものでございますから。

勇助 (上気して) わ、私だって、遊んでないわけじゃないんだ。私だって、遊んでますよ。当然でしょう。

と勇助がいきなり立つとまた酒がこぼれ、お篠の着物にもかかってしまふ。回りの者は慌てるが、お篠は取り乱しもせず、に、周りを制すると、

お篠 良い絵を描いておくんなまし。綺麗な錦絵をみたり、面白き草双紙を読んだりしやんすが、あちきどもには、何よりの気慰めにありんす。

勇助 は、はい。

西村屋 おやおや、今度はお顔が真っ赤ですなア。

などと一同、和やかに笑い合っている。

すると突然、外で賑やかな声が出たかと思うと、伝蔵が座敷に現われる。

一同、何事かと驚くうちに、伝蔵に続いて、棺桶が一つ運び込まれて来る。

伝蔵 いやア、葬式の最中に隣で火事が起きちまって、そら逃げろって棺桶担いで走り出したのはいいけど、俺たち、逃げ込む場所ったら、吉原しか知らねエもんだから……参った、参った。(棺桶を担いだ者たちに) もういいよ、ちよつと休もう。

そう言われた者たち（黒衣）は棺桶を置いてそれぞれに休む。

南畝 こりや、棺桶じゃないか。

一同 ええ！？

伝蔵 そうだよ。

南畝 中はいったい何なんだ。

伝蔵 仏様に決まったら。

一同 ええ！？

初鹿野は静かに立ち上って、伝蔵の前に進み出て、

初鹿野 これは、何事じゃ？

伝蔵 で、ですから……アツシの友人の彫師の見習の新吉と申す者が、突然死んじまったんでございます。で、本日、その弔いでござりましたが、あろうことか、俄に隣家で火事が勃発致し候うて、南無三、これはどうしたものか、と一同、肝冷やし慌てふためきて……

初鹿野 ここに担いで参ったと申すか！

伝蔵 新吉は吉原が大好きだったもんでございますから。

初鹿野 吉原といっても広いんだ。ここを初鹿野の座敷と知った上で参ったのか！（脇差の柄を掴んで）許さぬ！ 控えおろう！

伝蔵 な、なんだア……

初鹿野 （伝蔵に迫って）貴様、何者じゃ。

伝蔵 俺は質屋の伴の伝蔵だ。ケツ、虱と侍が怖くって江戸に住めるかってんだ。

重三 バカ、やめろ、伝蔵！ お待ち下さいまし……

初鹿野 だけ！

初鹿野は脇差を抜く。

重三・伝蔵 （腰を抜かして）ひええつ。

座敷は騒然となる。しかし春町だけは落ち着いて、

春町

そりや、しょうがない！突然の火事じゃねえ！そりやお弔いの最中に火事で丸焼けになっちゃ仏様も可哀想だ。（おもむろに棺桶の前に酒など供えて）それに聞けば見習いとは言え彫師の人だというじゃありませんか。私たちがいくら上手く筆を走らせたって、彫師が上手く版

木を彫り、摺師が紙に摺り上げてくれなくちゃ、本や絵にはならないんだ。ちようどこに揃っているのは日ごろ彫師にはお世話になっている者たちばかりだ。これも何かの因縁でしょう。どうです、感謝の心で手を合わせようじゃありませんか。

春町が手を合わせると、

初鹿野 ……

重三 な、なるほどオ、こりや確かに偶然とはいえ、きつと何かの巡り合わせに違いありませんよ。私も弔わせて頂こう。(一同に) どうです、皆さんも御一緒に。

すると真つ先にお篠が棺桶の前に座って手を合わせる。他の者たちもすぐに続く。

春町 こいつは粹な葬式だ。私も死んだら吉原で葬式やつてもらおう。ねえ、初鹿野様。

しかし、そこに今度は鉄蔵が仲間を連れて現われ、棺桶の前に供えられた花や酒などを蹴散らし始める。

伝蔵 な、何しやがんだよ。

と伝蔵は鉄蔵を止めようとするが、反対に鉄蔵に張り倒される。

鉄蔵 ふぎけんじゃねエよ。仲間の棺桶勝手に持ち逃げされて俺たち彫師の面目は丸潰れだ。この落とし前、どうつけるつもりだ。

重三 (鉄蔵をなだめて) ちよつと落ち着けよ。鉄蔵。これには深エわけがあるんだ……

鉄蔵 俺たちを下働きだと思って馬鹿にすんじゃねエぞ。

重三 誰も馬鹿になんかしちやいないだろう。

鉄蔵 職人をナメんな!

春町 よしなさい鉄蔵! お前はまだ見習いだろ。

鉄蔵 (暴れて) うるせエんだよ。どけよ、テメエら。女郎なんか手を合わされちゃ、仏様、地獄に落ちちまうぜ。

南畝 しかし、あなた、急な火事が起こったんだから仕方ないでしょう。

鉄蔵 火事……？

南畝 それほど大切に思う仲間の棺桶なら、どうして火事が起きた時にお前たちが担いで逃げなかったんだ。

鉄蔵 何言ってやがんだい。火事がどこに起こったんだ。こいつらが突然、棺桶担いで走り出したんじゃないやねエか。

南畝 え、しかし、葬式の最中に火事が起きて……おい、伝蔵、どうなってるんだ。

伝蔵 だ、だから、そのよオ、なんだア……（困って）兄貴イ……

するとまた初鹿野が怒って、脇差をふりかざし、

初鹿野 何がどうなっているんだ。お前たちは、ワシの座敷をどうするつもりだ！

たまらず重三は両手をついて、

重三 申し訳ござりません。悪いのはこの蔦屋でござりまする。

伝蔵 兄貴ッ。

重三 こりやもう駄目だよ、伝蔵……（初鹿野に）全部私の差し金でござりまする。私がこいつに棺桶持たせてござりまする。

初鹿野 どう言うことじゃ。

あまりの剣幕に男衆が腰を抜き、棺桶と激突する。その衝撃で棺桶から転がり出す死体。

その死体に遊女のお菊が縋って泣き崩れる。

お菊 新吉さん！ 新吉さん！ 新吉さん……！

一同 ……

お篠 お菊ちゃん、よかったね。本当だったら、どんなに恋しい人が亡くなったからって、私たち遊女はお弔いに行くどころか、ただ泣いてることさえ許しちゃもえないんだものね。お菊ちゃんは幸せ者だよ。大好きな人のお弔いがちゃんと出来たんだから。そりや女郎なんかに手を合わされちゃ、せつかくきれいな体で極楽行くのに、仏様、具合が悪いかもしれないけど、新吉さんはお菊ちゃんのこと、本気で思ってくれてたからさ、きつと迷惑がってなんかいないと思うよ。きつと喜んでると思うよ。

お菊は重三に手をついて、頭を下げる。

重三 な、なんだよ。よしてくれよ。シヤレだよ、シヤレ。礼ならこの伝蔵に言いな。そもそもはこの伝蔵が、お菊ちゃんのことを哀れがって、なんとかしてえと、言い出したんだ。

伝蔵 ちゃんと、お弔いが出来てよかったよ。なあ、お菊ちゃん……

お菊 伝蔵さん……

伝蔵は泣くお菊を慰める。

西村屋 しかし、ご無礼にも程があるでしょう！ これだから成り上がり者は困るんだ。

春町 西村屋さん、筋書きに文句があるんだったら私に言って下さい。この滑稽話の版元は薦重だが、筋書きを書いたのはこの春町なんだよ。急いで作ったもんだから、あんまり出来はよくないけどね。

西村屋 春町先生……

初鹿野はまだ脇差を抜いたまま立ち尽くしているが、

春町 初鹿野様、郭内で刀は御禁制でございますよ。第一、せつかくの粹人ぶりが台無しだ。

初鹿野 貴様、ワシのやることにそんなに気に入らぬか。ワシをコケにしたいか。笑いたいか。

春町 何をおっしゃいますか。洒落ですよ、洒落。笑って酒に流して下さいまし。

初鹿野 倉橋っ。

春町 よして下さいな。この吉原じゃ、私の名前は恋川春町でございます。

春町は笑う。

しかし初鹿野は黙って去る。

やがて、それぞれに座敷を去って行く。

重三 ちよいとお店の方……（初鹿野から受け取った金を差し出し）ご迷惑をおかけしました。

重三、お篠、そして勇助が残される。

お篠 重三さん、ありがとうございます。私、この吉原に来てから、こんなに嬉しい思いをしたの、初めてです。

重三 春町先生のお陰だよ。先生がいなきや、こんなこと出来やしねえよ。しかし無茶なことやらすぜ、春町先生も……俺はもう、死ぬと思つたぞ。無事でよかつた……

重三とお篠、笑い合う。

そんな二人の様子を見て、勇助も立ち上がり、帰ろうとする。

重三は慌てて、

重三 本日はまことにご無礼なことを致しました！ 是非またあなたの絵を……

しかし勇助は黙って懐から初鹿野にもらつた金子を取り出すと、

勇助 お店の人！ お店の人！ご迷惑をおかけしました！

金子を投げ捨てて去る。

重三は頭を下げて勇助を見送っているが、気がつくとお篠が背中に頬を押しつけている。

お篠 身請けの話があるんです。

重三 ああ、聞いたよ。

お篠 でも私はお断りするんです。

重三 断ることなんか出来るのかい？

お篠 はい。私がそう言えば、お店の母さんは喜んで算段してくれます。

重三 そりゃ、店は看板のお前を手放したくはねえだろうが……身請けされれば、目出度くこの吉原を出て、辛い勤めもしなくて済むようになんじゃねえか。

お篠 好きでもない人のお妾さんになるのだから、辛い勤めに変わりはありません。晴れて年季が明けるまで、私は自分一人でやり遂げます。それに、この吉原だって、辛いことばかりじゃないもの……

重三 お篠ちゃん……

お篠 動かないで。も少しだけ……ああ、火事でも起きちまわないかしら。このままどっかに、運んじまってもらいたい……

そこに男衆（黒衣）が来て「篠竹太夫、お下がりでございます！」

お篠は、静かに立ち上がり、男衆と共に去って行く。

吉原門前、五十間道の蔦屋。

土産物屋のような粗末な店のその店先。

伝蔵が店番をしながら熱心に書き物をしている。春町がそばにいて書き上げた物を読んでいることにも気づかない。

春町 伝蔵は絵の腕もいいが、文章の方もなかなか筆が立つねエ。

伝蔵 (驚き) えっ……なんだ春町先生か。

春町 何度呼んでも返事がないからさ……お前、戯作もやるのかい。

伝蔵 戯作って……ああ、これか。これはおいらが好き勝手に書いてるだけだよ。

春町 戯作なんてのは、どれも好き勝手に書くものじゃないか。書けと言われて嫌々書くなんてのは戯作じゃない。お前、上手だよ。どんどん書いて腕を磨くといい。

伝蔵 先生にそんなこと言われたら、本気になっちまうぜ。だけど、おいら、本当は絵を描かなきゃいけないんだ。なんたって師匠について絵描きの修業中なんだからさ。

春町 大名のお抱え絵師じゃないんだから、好き勝手にやりゃいいんだよ。

お前、我慢とか辛抱なんて言葉好きかい？

伝蔵 聞くのも我慢できねエな！

春町 私もそうだ。私は立派じゃなくて構わねえから、面白く過ごそうぜ。いいこと言うなア。ちきしよう、おいらは神掛けて、もう我慢なんかしねえぞ！

春町 しゃらくせえよ。そもそもな、こんな浮き世に生まれてきたのが間違いだ。どう生きたって、これ以上に間違いようはねンだって。

そこに鉄蔵がやってくる。

鉄蔵 蔦重いるか。

伝蔵 またおめえか、何の用だ。

鉄蔵 オウ、こないだはよくも俺たちに恥かかしてくれたなア。

春町 おい鉄蔵、なんて口のきき方だよ。それじゃやくざ者の出入りだよ。テメエもいんのか。

春町 そう、いきりたつな。相談ごとなら聞いてやるよ。

鉄蔵 黙れ。俺はテメエみたいな狸じじいは大嫌いなんだよ。わかったような面して善人ぶりやがって。だけど所詮テメエは侍じゃねエか。

春町 確かに私は駿河小島松平家の江戸御留守居役なんていう、どうでもいいような侍だが、それがどうした。

鉄蔵 侍に何がわかるか。

春町 ああ、何ンにもわからないよ。

鉄蔵 ちきしょう。ちよつと筆が立つからって、世の中全部見透かしたようなつもりでいやがる。まったく虫酸が走るぜ。テメエらのやってることなんてな、有つても無くてもいいようなものなんだよ。浮世絵だとか黄表紙なんてもんがなア、この世から消えたって誰も困りやしねえんだ。

そこに重三が戻ってきて、

重三 どうした？

鉄蔵 オウ、蔦重！ こないだの借り返しに来たぜ。

重三 ナンだ、テメー。やんのかこの野郎、何だか知らねえが、こちとら、面白くねえことがあつて、むしろくしゃしてんだ。喧嘩なら、いくらでも買うぞ。かかつてきやがれ！

鉄蔵 なんだとお！

そして重三と鉄蔵が取つ組み合うが、そこに乱入してくる黒衣数名が、鉄蔵を引き離し、羽交い締めにする。

鉄蔵 放せ！ 放しやがれ！ こんちくしょう！

黒衣たちに続いて彫り師の親方・彫達と摺り師の親方・摺松もやって来る。

やがて彫達が手に持つ杖で鉄蔵をしたたか叩きのめす。

彫達 馬鹿野郎、とつと仕事に戻りやがれ！ オウ、連れて行け。

鉄蔵は黒衣に連れられて去る。

彫達 あの若僧、絵心もあつて腕はいいんですがね。性根がねじ曲がつて、どうにもいけねえ。

春町 鉄蔵は、よつぽど、何かを我慢してるんだろうねえ。

彫達 まことに申し訳ねえ。

重三 いえいえ、それより、彫り師の大親方と摺り師の若旦那が揃って何の

御用でしょう？

彫達 他でもねえ、錦絵問屋の株の件だよ。

摺松 聞きましたよ。日本橋の近江屋の話。店ごと売りに出してあったのが、葛屋さんが買いに出たら、他の問屋たちが邪魔に入って破談になったって。

重三 そうなんすよ。アツシは、方々に頭下げ回って金まで工面したんすよ……そんで、まとまりかけてたんだ。それが突然、なかつたことにしてくれって。どこかけあつても埒明かねえし。そうこうするうち、とうとう余所に売られちまつたんだ。

伝蔵 なに！ 結局ダメになっちゃったの、日本橋！

重三 そうだよ。たつた今それを聞かされて来たんだ！ 他の版元どもの嫌がらせだ。俺はもう、腹立って、腹立って……こんちくしょう！

摺松 アツシらも得心がいきません。アツシら摺り師と彫り師仲間は、みんな、葛屋さんの味方ですからね。

重三 ありがとうございます。

彫達 俺らは、おめえさんに錦絵を出させてえんだ。おめえさんは、誰もやったことがねえような、面白え仕事をやらせてくれそうだからさ。

重三 そのお言葉、この肝に深く銘じておきます。へえ、誰もやってねえことを、一番にやってご覧に入れる。それこそ葛屋の信条でございますよ。どうぞお上がり下さい。オウ、伝蔵、酒だ、酒をお出ししろ。

伝蔵 がってんだ！ どうぞ店の内に。

職人たちは店内に入る。

そこに勇助がやってくる。手には風呂敷包みを下げている。

勇助 ごめん下さい。葛屋さんはいらつしやいますでしょうか。

重三 (驚いて) これは、よくいらして下さいました。

勇助 実は……葛屋さんに私の絵を見て頂けないかと思ひまして。

重三 絵を……

勇助 はい……私は永らく絵の修業をしてきましたが、まだ一枚の挿し絵を描いたこともなく、ただ描いては師匠に見てもらおうと言うだけで、今まで自分の絵を他のお方に見てもらおう機会がありませんでした。そこで是非一度、誰ぞ目利きの方に見て頂いて、意見などを聞いてみたいとかねがね思っていたんですが、葛屋さんなら、私と歳もたいして違わないし、なにより末は錦絵まで手掛けようと言う方だから、絵のわかる方に違いないと思つて、ご無礼を承知でこうして絵を持参して伺つたんです。

重三 そりや、あなたの絵なら、何を置いても見せて頂きたいですよ、はい！

勇助は絵の束を重三に差し出す。

重三 これ全部、あなたの絵ですか。
勇助 はい。

重三は一枚ずつ手に取りながら絵を見てゆく。伝蔵と春町、彫達と摺松に、その弟子たち（黒衣）もそれを覗き込む。

伝蔵 うめエなア……とてもじゃねえがかなわねえや。おいら、やっぱりもう絵はやめた。

重三が一通り目を通すと、

勇助 （重三をじつと見て）どうですか。
重三 本当に全部あなたの絵ですか。
勇助 はい。

重三は三枚の絵を抜き出して、

重三 俺にはこの三枚だけは筆の運びが全然違つて、他の絵より数段落ちてるような気がするんだけど……本当にこれもあなたが描いたんですか。

重三はじつと勇助を見返す。勇助は笑い出して、

勇助 一応、絵を見ることは出来るんじゃないか。
重三 ……

俺の絵を錦絵にするなんて偉そうなこと吹きやがるから、どんな野郎かと思つたけど、仲々見込みがあるよ。おめえ、女郎の機嫌取りが上手いだけじゃねエみたいだな。

重三 ……俺は初めてあなたの絵を見た時、素晴しいって言っただろ。それはお世辞でもお愛想でもなく、まして石燕先生のお墨付きだからなんて理由でもなく、この目で見たまま、心の底から素晴しいって言ったんだよ。どうしてそれを信じてくれねエんだ……ガキの頃から絵や書き物の刷り物が三度のメシより大好きで、それが高じて、いつかそう

いう刷り物を自分で作る版元になると、十二の春に決めてから、この目ん玉を本物にする修業だけは、一日たりとも怠ったことはねえ。名も金も持ちゃいねえが、この二つの目ん玉が蔦重の財産だ！（三枚の絵を破いて）誰が描いたかわからねえような、こんな下手クソな絵を混ぜたりしやがって、これで俺を試したつもりか。ふざけんな！

そして重三は破いたその絵を勇助に投げつけて、

重三 帰れ。俺はなア、どんなに腕が良くなったってなア、この俺の目を疑うような奴とは絶対に組まねえからな。

勇助 馬鹿野郎、誰が teme と組むなんて言ったんだ。俺に描いてもらいたいなら、素直にそこで土下座しろ。

重三 ちよつとおだてられたぐらいで、自惚れやがって、まアせいぜいお偉い先生方に可愛がってもらって、一生期待の新鋭やってるよ。

勇助 何をッ。

勇助が重三に掴みかかって、喧嘩が始まる。店内から飛び出した黒衣たちも加わって、再び大乱闘に。

いつの間にかそこに来ていた南畝が止めてる。

南畝 やめなさいって！ なんだ、こりや。

春町 いらっしやい。

南畝 いや、こないだのこと謝つといた方がいいと思つて、西村屋を……

西村屋は乱闘に巻き込まれていた。

西村屋 （怒り狂つて）勇助さん、こりやいったい何事ですか！

勇助 ……

西村屋 蔦屋さん、あなた勇助さんをこんなところに連れ込んでどうしようつて言うんです。

伝蔵 こいつの方から、勝手に「絵を見てくれ」つて来たんだよ。

西村屋 （伝蔵の手から絵を奪つて）そりや本当ですか。

勇助 ……

西村屋 あなたも純な方だから……どうせ錦絵出してやるとか何とか、甘い言葉に誘われたんだろうけど、吉原門前の土産屋に錦絵なんか出せはしませんよ。

伝蔵 土産屋とは何だよ。

西村屋 じゃなきや、ダンゴ屋か！ さ、帰りましょう。こんなところで油を売ってる暇があったら、その腕にもっと磨きをかけなきや。(一枚の絵を差して) ほら、こちら辺なんか、石燕先生の繊細な筆遣いに比べたら、月とすっぽん。まだまだ甘いね。土産屋の目はごまかせても、日本橋の版元の目はごまかせません。さ、行きましょう。

しかし勇助は動かない。

勇助 俺には将来があるなんて、あんた本当に俺の描いた絵を見て言ってるのかよ。

西村屋 どうしました。

勇助 あんたがけなしたその一枚は、俺が描いた絵じゃなくて、石燕が描いた絵なんだよ。

西村屋 え……

勇助 何がエだ、ふざけんな！ 人の将来、決めるつもりがあるんだったら、テメエもその目に命を賭けて、絵を見たらどうなんだ。絵もよく見ねエうちに裏返しにして、絵師の名前で値打ち決めてるからそんなことになるんだよ。(絵を西村に突きつけて) よく見ろ。これが俺の絵だよ。どうだ。えっ。その目でよく見てみるよ。

西村屋 そ、そりや結構な絵でございますよ。

勇助 当たり前だ。俺の絵はいいんだよ。それなのに、なんでこんなにいい絵がまだ一枚も世に出てねえんだよ。そりや、お前たち版元が手を抜いて仕事してるからだろ。両目をちゃんと開けてよく見てねえからだろ。俺はもう、時が来るのをじっと待ってるなんざ、うんざりなんだよ。(拳を振り上げて) 俺がその目を覚ましてやろうか。

すると西村屋は慌てて逃げて行く。他の者たちは呆然としているが、

勇助 おい、鳶重！

重三 ……

勇助 (じっと目を見て) 俺の絵を錦絵にする気があるのかよ。

重三は頷く。

勇助

俺はお前が気に入ったぞ。俺は今までどんな野郎にも、褒められたことしかなかったんだよ。それが、面と向って絵を破り捨てられたのは

初めてだ。

重三
は？

勇助
下手クソだって、お前が破いた絵の中には俺が描いた絵もあったんだよ。

重三
(慌てて) えっ！

勇助
そうだ、俺のエ、だ！

重三
そ、そいつア、悪かったなア。おい伝蔵……

伝蔵
何やってんだよ、兄貴！ もう……どれよ？ 張り付けンだよ。糊どこよ！

重三と伝蔵は慌てて破いた絵を拾い始める。

勇助
俺はもう怒ったぞ。描いて、描いて、描きまくってやる。(重三に) テ

重三
メエ、逃げたら承知しねエからな。
(泣いて) 大事な作品、破いちやって、ごめんねえ！

勇助は走り去って行く。

(イ)

重三、三十歳の頃。
あるお茶屋の奥座敷。
妖艶な遊女玉虫を前にして、勇助はその女の姿を絵にしている。

玉虫 ねえ、勇さん、まだア。

勇助 おい、動くなよ。

玉虫 いくら精出して描いたって、売り物になるわけじゃないんでしょ。ね
エ、だつこオ。
勇助 おや……

と勇助は玉虫のそばに寄る。玉虫はなまめかしく科など作ってみせるが、勇助は玉虫の襟足などをじつと見て、

勇助 なるほど……

玉虫 私は盆栽じゃないんだよ。じろじろ見て、ブツブツ言ったり、唸ったりするのやめとくれ！ ねエ、勇さん、つまんない。

勇助はどうとう筆を置いて、

勇助 やめた、やめた。そりゃ女は見るもんじゃなくて、抱くもんだよなア。

二人は声を上げて乳繰り合い始める。そこに重三がやってくる。

重三 おい、勇助、どうだア？

勇助 (玉虫と戯れ合いながら) オオ、ちゃんとやってるぜ。女を描くためには、女のことがよくわかってなくちゃいけねエからなア。これも辛い修業だよ。

重三は黙って勇助が描き散らかした絵を見る。

やがて懐から金を出して、

重三 足りなかつたらまた持つてくるから。じゃあな。

勇助 おう、待てよ。

重三 修業の邪魔しちゃ悪いだろ。

勇助 けッ！

重三 良い絵を描いてくれ。

勇助 それしか言えねエのかよ。いくらいい絵描いたって、それが人に見てもらえるアテがないんじや、誰だつて本気にはなれねエだろ。いいか、俺は俺の絵を錦絵にして世に出すために、師匠から頂いた名まで捨ててここに來てんだぞ！

重三 だから二人で新しい名をこしらえたんじやねえか。俺の家名の喜多川に、天地（アメツチ）動かす三十一文字（ミソヒトモジ）の歌麿だ！

勇助 錦絵はどうなつてんだ！

重三 すまねえ……もう少し待つてくれ。だが、必ず出す。俺には、お前の腕が必要なんだ。なぜかつて言うとな、俺には絵が描けねエからさ。どんなに錦絵が出したいと思つても、絵の良し悪しはわかつてもな、自分じゃ描くことができねエんだよ。俺に出来ることは腕のある奴をこの目で見つけだして、描いてもらうことだけなんだよ。だから俺はおまえが美人画を描きたいと言うなら吉原に通わせるし、景色が描きたいなら旅にも行かせるよ。とにかく俺の仕事は出来る限りの支度を整えて、あとはお前がいい絵を描いてくれるのを待つだけなんだよ。絵が描けねエ俺には絵師の苦しみなんてのは正直なところわからねエ。俺が代わつてやれるようなもんでもねエだろ。でも、もし何か手伝えることがあるなら何でも言つてくれ。絵を描く以外のことなら俺は何でもやつてやる。それでもその気になれねえて言うなら仕方ない。俺はお前が本気になるまで待つ。

勇助 お篠、抱かせてくれよ。俺はあの女が抱いてみてえや。あんたいつも抱いてんだろ。俺にも一度抱かせてくれ。

重三 俺はお篠を抱いたことはないよ。

勇助 嘘をつくなよ。

重三 本当だ。一度もない。

勇助 そんなこた、どうでもいいや。俺はただ、ああいう最高の花魁を抱いてみてえんだよ。

重三 ……

勇助 何でもやつてくれるんじやねエのかよ。

重三 （玉虫に）お篠、呼んできてくれ。

玉虫 あたしはどうなんのさア。

重三 （厳しく）いいから早く呼んでこい。金なんかいくらでも出すから今

すぐにだ。でなア、いいか、蔦屋が呼んでるって言うんだぞ。勇助のことなんか一言も言うなよ。俺がお篠を待つてるって、それだけ言うんだ。いいな。早くしろ。

玉虫は慌てて出て行く。ふたり、睨み合ったまま長い間。

そこにお篠が息せき切ってやってきて、重三を見つけると、

お篠
重三さん……

重三と勇助は睨み合ったままである。

お篠

（明るく）重三さんが呼んで下さったって聞いたから、私、大急ぎで……

しかし重三はお篠の言葉を遮るように立ち上がった、

重三

お篠、勇助を頼んだぜ。

お篠

重三さんが……重三さんが呼んでくれたんじゃないですか。

重三

俺が呼んだんだよ。お前も、勇助も、二人とも俺が呼んだんだ。

重三、去る。お篠、呆然としていると、

勇助

蔦屋がお前を買ったことないってのは本当なのかよ。

お篠

はい、重三さんが私を呼んでくれたのは、今この時が初めてです。

勇助

あいつはね、俺のためにあんたを買ってあてがってくれたんだよ。いい女抱いて、いい絵を描いてくれたな。

お篠

あの人は私が初めて会った頃から、錦絵錦絵って言ってましたから……

そして、お篠は煙管に煙草を詰め始める。

お篠

吉原に売られてきたばかりの頃、私がお店の裏で泣いていると、あの人が元気づけてくれたんです。その頃のあの人はまだ貸し本屋みたいなことをやっていて、背中に一杯本を担いで吉原のお店を回ってたから……あの人は泣いてる私を見つけると優しい言葉をかけてくれて、綺麗な錦絵を見せてくれたり、おかしな絵草子を読んでもくれたり……私、吉原に来てから人に親切にされたことなんてなかったから……

(煙管を吸い付け、勇助に差し出して) いい絵、描いてあげて下さいね。

勇助 嫌なら出て行ってもいいんだぞ。

お篠 私は女郎ですから。

勇助 その顔に隠れてるお前の心当てて見せようか。あの人のためなら我慢しよう……凶星だろ。

お篠は煙管を持つ勇助の手をじっと見て、

お篠 私、勇助さんになりたい。だって勇助さんになれば絵を描くことが出来るんだもの……これを私に下さい。絵筆を持つ、この手を私に下さい。

お篠は勇助の手に頬を寄せる。

勇助 その顔に隠れてるあなたの心当てて見せようか。この男に抱かれても、あの人のことだけ考えてみよう……

勇助はお篠を突き放し、

勇助 女郎の顔に隠れた本心なんてなア、見え透いてんだよ、馬鹿馬鹿しい。
お篠 待って下さい。もう一度、もう一度、私の顔見て下さい。

勇助 ……

お篠 重三さんのためならって言う気持ちは本当です。私に出来ることがあるのなら、私、どんなことでも我慢して、お手伝いをしたい。だけど、もう一つのこととは……あの人のことだけ考えていようって言うのは、それは違います。私の顔、もう一度よく見て下さい。

勇助はお篠の顔を見る。

お篠 ……初めてお店に出された日に、花魁の姉さんがそういうふうに見えるてくれました。好きな人のことを考えていればいいんだよって。どんなお客だって、お金で女郎の身体は買えても、心までは買えないんだからって。だから私、一生懸命、好きな人のことだけ考えていようと思いました。どんなお客さんについても、どんなことをされても、心を、大好きなあの人のことだけで一杯にして、辛い時間をやり過ごそうって思っただけです。だけどね……難しいんですよ。そんなことできない

のよ……だって、いくら心は別だって言っても、心つてのはこの身体の中にあるんだもの。悲しいけど、悔しいけど、男の人の腕に抱かれて、この身体を合わせてると、時々、何が何だかわからなくなってしまうって、あの人のことで一杯になっているはずの私の心に、ぽっかりと穴があいてしまうんですよ。好きな人のことさえ、忘れてしまうことがあるんです。それはほんのわずかの間、息を吸って吐くほどの短い間のことなんですけどね、この心が私に背いて、あの人の姿を消しちまうんです。一番大切に思っているはずの、あの人の姿を……

勇助はお篠をじつと見ている。

お篠

あの人がどうして今まで私を呼ぼうとしなかったのか。私にはよくわかってます。あの人はきつと私が悲しむと思ってるんです。吉原で、ほかの男の人たちと同じように私を抱くと、私が傷つくと思ってるんです。あの人、私のことをもつと綺麗な女だと思ってるんです。もつと強い女だと思ってるんです……それなのに、私はあの人を裏切ってるんです。ねエ、私の顔、見て。

勇助

……

お篠

教えて下さい。この顔に隠れてる私の心の底に何が見えますか。私の心の中にはいったい何が住んでるんですか。私の心は誰のものなんですか。私、重三さんが好きなんです。だけど他の男の人に抱かれて、重三さんのこと忘れてしまうんです。本当に優しくしてくれた重三さんのことより、お金で一晩だけ私を買ってくれた人の方を愛しく思ってしまうことがあるんですよ。ねエ、私の顔を見て。いったい何が見えるの。

間。

お篠

あの人のこと裏切るのが辛いから、今はもう私、何も考えないことにしてるんです。目の前にいる男の人を、とにかくまっさらな気持ちで見、苦しいよりは楽しい方がずっといいから、なるべくその人のことを好きになることに決めたいんです。

二人はじつと見つめ合っている。

お篠

もうこれ以上、あの人のことは言いません。だから私を一人にしないで。忘れさせて下さい。何もかも忘れさせて……

二人は互いに強く抱きしめ合う。
やがてお篠は勇助の手を取り、奥の間に。抱き合いつつ倒れ
る二人の姿がそのまま障子越しのシルエットになる。

(口)

幻想的に行き交う行灯。それは重三の見る幻しか。
流れ行く人々の影のように重三を翻弄する。

重三は行灯に追いつがらぬ。必死に頭を下げている。
錦絵株を求めて。

重三 江戸版元の皆様、何とぞ、この蔦屋にお取りはからいを！ 錦絵株を
お譲り下さいませ。この蔦屋に錦絵を！

行灯に紛れて西村屋も通りかかる。

重三 西村屋様！

西村屋 ははははは……

西村屋も去り、重三一人、

重三 なあ、勇助！ 錦絵を出すのはなあ、お前だけの夢じゃねえんだよ。
俺にとつても一世一代の大勝負なんだ。使い捨ての吉原案内しか出せ
ねえ、場末の貸本屋で終わるか、いつまでも大切にしておいてもら
えるような黄表紙や錦絵まで出せるいっぱしの版元になるか。自分が
一生懸命作った物、簡単に捨てられちまうのは悲しいもんなあ。どう
せなら宝物みたいに、大切にしてもらいたいもんなあ。俺はなあ、捨
てようたつたつて捨てきれねえような、ボロボロになつてもとつとい
てもらえるような、最高の錦絵を世に出してえんだよ。

再び行灯が行き交う。

重三はその後を追って、去る。

障子が開き、閨から勇助が出てくる。
お篠も出てくる。

勇助 あいつが見えるよ……やっぱりあなたの心には惚れた男が消えずにいるよ。

お篠 勇助さん。絵を描いてあげて。いい絵を描いてあげて。

勇助はお篠を抱く。

勇助 そればかりは、俺にもどうすることもできねえんだ。絵ってのは、俺が描いてるわけじゃねえ。何か別の力がな、俺を使って描かせてんだ。

お篠 ……
勇助 けど、あんた、ぞつとするほど綺麗だよ。俺はきつと、あんたのことをいつか絵に描くよ。

そして勇助は去る。

お篠はそのまま肩を震わせて泣き始める。

しばらくお篠が泣いていると、一人の男が座敷を覗き込む。

春町である。

春町 どうしたんだい。何を泣いてるんだ。

お篠 助けて下さい。もう嫌だ。

春町 ……

お篠 こんなこと我慢してるのもうたくさん。お願いです、助けて。私をこの吉原から連れ出して。

春町 私たちは大門の外が辛くって、この吉原に逃げ込んで来るってのに、お前さんはここが辛くて、大門の外に逃げ出したってわけか……世の中、うまくいかねえなア。

お篠 もう嫌だ……

春町 しかし、大門の外に逃げ出すと言ってもなア……いつか流れた初鹿野の身請け話なら、私がもう一度話をつけて来てあげてもいいけど、あいつの妾になるんじゃ嫌だろ。

お篠 もう、どこだって構わない。私、ここ以外ならどこだっていい。とにかく吉原だけはもう嫌だ。助けて下さい。私、このままじゃ気が狂う。

春町 わかった、わかった。安心しなさい。私が何とかするよ。それにしてもいっただいどの男だ。吉原一の美人をこんなに泣かしやがって、しやらくせえ。

そこに伝蔵が駆け込んで来る。

伝蔵 兄貴ッ。大変だよ！（春町に気づいて）なんだ、先生もここか。

春町 何事だよ、騒々しい。

伝蔵 兄貴、どこか知りませんか？

春町 どうしたんだ？

伝蔵 日本橋だよ、日本橋。日本橋の丸屋が左前になってね、錦絵問屋の株と一緒に売りに出されることになったんだよ。ついに日本橋で錦絵だ。ちきしよう、こんな大切な時に、兄貴はどこだ！ 兄貴ッ！

と伝蔵は走り去る。

春町 お篠ちゃん、聞いたかい。

お篠は泣き崩れる。

その姿に、歌麿の描いた美人画が重なる。

重三、日本橋進出の日。
間口五間の、真新しい重三の店、耕書堂。
店の前に立つ重三。
その前に彫達と摺松、その弟子たち（黒衣）が居並ぶ。

彫達 （音頭をとって）めでてーな。
弟子たち （手を打ち）めでてえ、めでてえ！
摺松 日本橋耕書堂の、新装開店、おめでとうございます。
一同 おめでとうございます。

そこには今や一流絵師、喜多川歌麿となった勇助と大田南畝もいる。
一同、酒を酌み交わす。

摺松 開店に先だって出した歌麿の美人画が大評判でございます。摺っても摺っても、注文に追いつきません。
南畝 蔦屋は、この歌麿を世に出すために、がんばって来たようなもんだからな。
彫達 （重三に一枚の板を差し出し）てえしたもんじゃねえが、これは祝いの印だ。
重三 これは……
彫達 おめえさんが最初にこしらえた吉原細見の版木さ。
摺松 この頃は未だ、一番安い墨の一色摺りですねえ。
重三 早く、何枚も版木使って、たくさんの色を重ねて刷り上げた、キレイな摺り物作りてえ、って。それが夢だったんですよ……

そこに獅子舞が現われて、賑やかに暴れ回る。
重三らが何事かと驚いていると、獅子の中から一組の男女が顔を出して……
「おめでとうございます」
男は今や人気戯作者山東京伝となった伝蔵。女は年季が明けてその妻となったお菊である。

重三 お前たちかい。
お菊 すみません、驚かしちゃって。恥ずかしいよ、アタシは……

南畝 お菊ちゃんも、年季が明けるまでよく辛抱したねエ。
お菊 はい。この人がいつも励ましてくれてましたから。(と泣く)
伝蔵 泣くんじゃねえよ、こんな目出度え日に……馬鹿……(と泣く)

そして一同、改めて酒を酌み交わす。と、そこに若い男(左七)が使いから戻ってくる。

重三 左七、御苦労だったな。で、春町先生はどうした。

左七 お留守でした。

重三 それで……

左七 お留守じゃ呼んでこれません。

重三 面白い奴でしょ、こいつ？

京伝 こいつは最初、俺んとこに弟子にしてくれて来てんだよ。戯作者になりてえと。頑固な野郎でさア、仕方ないからここ紹介してやったんだ。

左七 お言葉ですが、私が最終的に目指しているのは、もつと高尚な読み物です。戯作修業はそこに至る通過点です。

京伝 何だと、こら！

そこに突然、西村屋が現われる。

西村屋 (怒って) 京伝先生つ。あなたいったい何やってんですか。

京伝は黙って獅子をかぶる。

西村屋 もう逃がしませんからね。

お菊 西村屋さん、もう少し待って下さい。

西村屋 待て待てっていったいいつまで待てばいいんですか。約束の期限はもう十日も過ぎてるってのに、先生はまだ半分も書いちゃいないんですよ。

お菊 必ず書きますから。

西村屋 お客様はねエ、山東京伝の新作を楽しみに待っているんです。

摺松 そうそう。うちらも次の仕事を止めて、先生の書き上がりを待ってるんですよ。

京伝 兄貴、せつかくのお祝いの日だったのにすまねエ。

重三 結構なことじゃないか。どんどん書いてくれよ。うちでもまた頼むからな。

西村屋　うちの先です！（と言いつつ勇助にも）歌麿先生、近い内には是非お食事でも。この西村屋のこと、お忘れになっちゃ嫌ですよ。

そして京伝と西村屋は大騒ぎをしながら店を出て行く。お菊も慌てて後を追って行く。

南畝　伝蔵もたいした物書きになったもんだなア……
重三　残ったのは野郎ばかりか……いつそ吉原にでも繰り出しましょうか。

気が付くと、皆、酒に酔って眠りこけている。

南畝　なア重三。
重三　はい。

南畝　今日は目出度い日だから言うのはよそうと思つてたんだが……実は、私は今度、幕府の役人になることになったんだ。

重三　なんだよ、それじゃ出世じゃないですか。目出度い話だよ。公儀（おかみ）もまんざら馬鹿じゃねエなア。

南畝　そんなことはどうでもいいんだ。ただね、役人なんかになっちゃったら、もう今までみたいに世の中おちよくなるような狂歌だの、黄表紙だの、書いてるわけにはいなくなる……

重三　……
南畝　つまり、筆を折らなきゃならないってことだ。
重三　筆を折るって……先生はそれでいいんですか。
南畝　そう決心した。
重三　……

南畝　私がこのまま続けたら、周りに迷惑がかかるんだ。出世なんか望んじやいないが、かといつて戯作に命、賭ける気もない。切羽つまった余裕のない戯作なんてのは、卑しくて私は大嫌いだ。

重三　そうですか……
南畝　重三、たぶん世の中が変わるよ。今、公儀はね、錆付いた武士の刀をなんとか研ぎ直そうと必死なんだよ。この頃じゃどこ行つたって武士よりは町人の方がずっと羽振りがよくて、偉そうにしてるだろ。これじゃいけねエと思つてるわけだよ。

重三　で、何が起ころんですか。
南畝　まだわからん。でも、公儀が本気になって動き始めたら、今までのようなわけにはいかなくなるな。特にお前たち、版元だの、絵師だのなんていう、必要以上に目立つちまつてる奴らは、真っ先に叩かれるこ

とになる。

歌麿

どうしてだよ。そりゃ俺たち確かに公儀のことが好きじゃねエけど、だからって別に、世の中ひっくり返そうと思ってるわけでもねエ。ただ好き勝手に絵描いたり、本書いたりしてるだけじゃねエか。

南畝

世の中をひっくり返すってのは何も刀を振り回して公儀の首をとることだけじゃないんだよ。お前たちが好き勝手に生きることが世の中をひっくり返してしまうことだってあるんだ。

……

一同

人が馬に乗る時に、その人間が馬をちゃんと操っていられるうちはいいけど、馬が本気で好き勝手に走り出してみる、馬にそんなつもりはなくても、人間なんてあっさりとは振り落とされちゃうんだよ。だから馬に乗る人間は、必ず馬が走り出す前に鞍を乗せ、轡を咬ませる。それでも足りずに手綱を握り、鞭を持つ。公儀にとっちゃお前たちは馬だ。公儀はお前たちが本気で好き勝手に走り出したら、とても自分たちには手に負えないってことをよく知ってるんだ。公儀はお前たちのその、走り始めたら公儀を振り落とすままだこまでも行っちゃまいそのな、奔放さが怖いんだよ。だから公儀はお前たちを絶対に好き勝手には走らせない。手綱を締める準備してる。

……

一同

現に一部ではもう始まつてるんだよ。あの春町だって、このところ屋敷の中ではとみに風当りが強くなって、毎日のように戯作の筆を折れと言われているらしい。

重三

春町先生まで……

南畝

あいつのところは吹けば飛ぶような小さな藩だからな。武士でありながら、役にも立たない戯作に現つをぬかしている奴がいると言うだけで問題なんだよ。それなのに春町ときたら、公儀を皮肉るようなことも平気で書くだろう。あいつもあのままじゃすまねエよ。

……

重三

とにかくあんまり無茶はするな。せつかく店が大きくなって、これからって時に気の毒だが、今、下手に目立っちゃったらみせしめにされるだけだ。お前たちは武士じゃねエんだから、潔く散ることよりも、しぶとく生き残ることを考えなくちゃいけねエ。いいね。

南畝

そして南畝は去って、

間。

重三

なア勇助、いったい誰に俺たちを止めることが出来るって言うんだ。

俺たちはもうとつくに走り出しちまつてるんだぜ。見てみるよ、この絵を。大判の錦絵だよ。六枚の版木を使った、二十色摺りだぞ。見て見るよ、この店を、花のお江戸の日本橋のど真ん中だぞ……

立ち上がり、

重三

おい、みんな、起きろ！ 起きろ、起きろ！ お楽しみはこれからじやねえかよ。見るよ、この歌麿の絵を！ 日本橋の耕書堂を！ 俺たちの宝だ。俺たちの城だ。誰のものでもねえ、誰に恵んで貰った訳でも、誰から奪った訳でもねえ。俺たちが俺たちの力でこしらえ上げた宝と城だよ。俺たちはもう知っちゃったんだ。自分がどれぐらいの早さで走ることが出来るのか。力一杯走るってことがどんなに気持ちのいいことか。ずっと遠くまで、どこまでも走り続けて行くってことがどんなに素晴らしいことなのか！

黒衣たちが騎馬を作り、重三と歌麿を乗せて走り始める。

重三

走れ！ 走れ！ 一度、好き勝手に走ることを覚えちまつた俺たちのことを、いったい誰に止めることが出来るんだ。俺たちはもう止まれねえよ。いや、止まったら駄目になる。まだ走れるのに、走ることをやめちまつたら、俺たちは俺たちじゃなくなっちゃう。俺たちはきつと自分のことを嫌いになるぞ。違うか、勇助。

歌麿

(騎馬を止めて) 俺たち、本当に早く走ってるのかなア。遠くまで走ってるつもりで、実は同じとこぐるぐる回ってるだけじゃねえだろうなア。

重三

……

今日、お篠が吉原を出るらしい。初鹿野に身請けされたんだそうだ。

一人はじつと黙ってしまった。

新吉原大門。

黒塗りの大門に青々とした若葉。

お篠が大門をくぐって吉原を出ようとしている。

ただ一人、見送りに来ている春町。

お篠はふと立ち止まって大門を振り返り、

お篠 先生、本当にこれでよかったのかしら。

春町 この世には正解も間違いいもない。ただ、空の上から私たちを見てるお天道さまの都合で、当りと外れが用意してあるってだけだ。

お篠 眩しい……

春町 ああ、また夏が来るな。

二人、じつと佇んでいるが、

お篠 先生、私、なんだか怖い……

春町 赤ん坊が、母親の腹から出て、この世に生まれてくる時に、あんなに声を上げて泣くのは、この世に生まれてくるのが辛いからだよ。よっぽど嫌なんだろうよ。その気持ちはよくわかるよな。

お篠 ……

春町 だけどその赤ん坊がしばらくこの世に生きて、年取って、今度は死ななきゃなんねエ時が来ると、そいつはやっぱり泣くんだよ。嫌々連れて来られたこの世から、やっとおさらばできるってのにな。その気持ちもよくわかるよな。

お篠 先生……

春町 (強く) 大丈夫だ。悪いことばかりじゃない。自分でそう決めたんだ。胸張って堂々と歩いて行きな。

お篠は大きく頷く。

とその時、烈しい罵声がして、幾人かの男たちが鉄蔵を引きずるようにして連れてきて、殴り、蹴り、捨て科白とともに大門の外に叩き出す。

鉄蔵はひどい傷を受けている。

春町 どうしたんだよ。

鉄蔵 (泣き叫んで) ちきしょう。

春町　また喧嘩か……あんまり無茶すんなよ。
鉄蔵　テメエらに、わかってたまるか、ちきしょう。

お篠は手拭で、鉄蔵の顔の泥を拭ってやり、傷の手当てをしてやる。

お篠　（傷を見てやりながら）鉄蔵さん、勇助さんや伝蔵さんが羨ましいんですよ。あの人たちは、誰の指図も受けないで、自分の好きなことだけやって、思いのままに生きているから、それが羨ましくて、悔しいんですよ。私もそう。私も重三さんたちが羨ましかったの。

鉄蔵　……
お篠　私たちも、やってみましょうよ。私たちも思いのままに生きてみましょうよ。

鉄蔵　わ、笑わせんじゃねえよ。女郎が何、戯言言ってやがんだよ。
お篠　鉄蔵さん、海を見たことがある？　富士山は？

鉄蔵　……
お篠　私は何も見たことがないのよ。絵で見て知ってるだけ。せつかくこの世に生まれてきたんだからさ、この目でいろんな物、見てみたいじゃない。いろんなこと、この手で試してみたいじゃない。せつかく生まれてきたんだから、この世のことを好きになってから死にたいじゃない。違う？　ねえ、鉄蔵さん……

その時、そこに女衞の六。売られた少女を連れてやって来る。

お篠　ちよつと待って下さい！　これを……これを……

と手荷物から、一冊の本を……

それはいつかお篠が重三から手渡された絵草紙である。

お篠はそれを少女に手渡してやる。

お篠　いいから、あんたにあげるから、年季が明けるまで元気で頑張るんだよ。

少女は絵草紙を抱いて門の内に。

お篠　先生、私、行きます。今日限り、私は生まれ変わります。私はもう泣きません。この私の二つの目は、たった今から、涙を流すためのもの

じゃなくて、この門の外に広がるいろんなものを、ありのままに見るためのものになるんです。お座敷に飾られた花じゃなくて、地面に根を張って風に揺れている花を見るんです。窮屈そうにさえざる籠の中の小鳥じゃなくて、翼を広げて思いのままに空を飛ぶ鳥を見るんです。格子のずっと向こうに遠く見える凍ったような三日月じゃなくて、歩いてるとどこまでも追いかけてくるような、大きくて、暖ったかい満月を見るんです。

春町

ああ、行つといで。でも、もし……もし、向こうで辛かったら、いつでも帰つといで。

間。

お篠

いいえ。私、もう二度とこの門はくぐりません。

そしてお篠は一人で去って行く。

後に北斎が描き上げることになる富士の絵がその背景に浮かび上がる。

少し遅れて、重三がそこに駆けつける。

しかし、そこにもうお篠はいない。

ぼう然と立ち尽くす重三。

気が付くと黒衣たちが、それぞれに浮世絵作りの仕事をしている。

美しい富士の錦絵が影となってゆく重三を見守っている。

■第二幕

天明七年、松平定信が老中となり、寛政の改革が始まる。

(イ)

重三たちの幸せの象徴である耕書堂が幻想的な光の中に浮かび上がる。

耕書堂は何かに戦くかのように静まりかえっている。

そこに幾人かの役侍が現われ、耕書堂を取り囲む。

やがて編み笠を深く被った一人の侍が進み出て、

侍

京伝作、蔦屋版の洒落本「錦之裏」「仕懸文庫」「娼妓絹篩」の三冊、風俗のために相ならぬ故、発売禁止。作者京伝は手鎖五十日、版元蔦屋重三郎は身代半減。公儀よりの御沙汰だ。

京伝が手鎖をされて連れ出される。京伝の傍にはお菊。お菊は編み笠の侍にすがりついて、

お菊

お奉行様、お願いでございます。どうかこの人を勘弁してやって下さい。この人はちっとも悪くありません。悪いとしたら、悪いとしたら……そりゃこの人を別人に変えちまう筆です。筆がこの人を変えちまうんです。この人は刀持だったって人なんか斬れやしないのに、筆持つと何だつて斬れるような気になってしまっただけなんです。お願いです。どうぞ、ご慈悲を……悪いのは筆でございます。悪いのは筆でございます……

侍

引っ立ってい。

京伝は役侍たちに連れ去られる。

お菊

あんた！

重三

伝蔵っ！

重三たちは必死に伝蔵の後を追う。

そこに春町も駆けつけてくるが、春町の目の前で耕書堂は幻想のように消え果てる。

そして、春町と編み笠の侍だけが残る。

(口)

春町と編み笠の侍はしばらくじっと立ち尽くしているが、やがて、

春町 今度の新しい御奉行様ってのは、あなたですか……

侍が静かに編み笠を取ると、それは初鹿野である。

初鹿野 この度の御改革のお陰でとんだ出世だ。笑いたければ、笑え。

春町 御改革、御改革って、公儀の都合で急に色々改められたって、こつち迷惑なだけだよなア。伝蔵、可哀想にな……

初鹿野 人ごとではないぞ、倉橋。城内では、侍の誇りを汚す、不埒なる恋川春町の名も取り沙汰されているのだ。

春町 書きたいことも書けねエか……しやらくせえな。

間。

初鹿野 以前、お前が戯作に書いたように、人生なんてものは一睡の夢なのかもしれないぬ。したが、人には、その時代、その時代で見えてはいけない夢があるのだ。

春町 人生がうたたねしている間に見る夢ならば、そのうたたねしながら見る夢の中で、私はやっぱりうたたねしながら夢を見ていたんです。そして、その夢の中でも、またやっぱり夢を見て、そしてそのまた夢の中でも……

初鹿野 倉橋よ、ワシらは公儀にお仕え申す武士なのだ。

春町 ……

初鹿野はゆつくりと歩き始める。春町も静かに後について行く。

春町と初鹿野が去ると、闇の中からまた耕書堂が浮かび上がってくる。

しかし、その耕書堂は間口半減のお咎めを受けた後のもので、荒れ果て、うす汚れている。

そこに一人の女が現われる。

顔を隠して、店先にためらうようにして佇む、それは……お篠である。

そこに若い旅姿の男(与七)がやってくる。

与七 (大声で)ごめんやす。

左七 (奥から出て来て) はい。

与七 わて、戯作者になりとうて、大坂からはるばるやって参りました、与七と申します。蔦屋重三郎様、いてはりまつか。

左七 せつかくですけど、今の蔦屋には人を置いておく余裕はありません。どうぞ、おひきとり下さい。

与七 まア、ええから、ええから。(と勝手に上がり込んで)これが名高い耕書堂か。せやけど意外に小さいなア。

左七 だから、つい最近、うちで出した山東京伝の洒落本三冊が、風俗のためによろしくないと、公儀からお咎めがあつて、店も財産もきつかり半分、取り上げられてしまつたんですよ。ただでさえ、このところの贅沢禁止、儉約第一の御改革で、版元はどこもやりにくくなつていふと言ふのに、身代半分取り上げられて、蔦屋は今、絶体絶命なんです。

そこに重三が顔を出して、

重三 おい左七、伝蔵が来たのか。

左七 いや、この妙な男が……

重三はお篠に気づく。

お篠 ……

二人、無言のうちに目が合う。

与七 蔦屋重三郎さんでっしゃろ。ね、ね！ 黄表紙の似顔で見たことあり

まつせ。本物や。与七と申します。戯作者になるために大坂より、東海道五十三次膝栗毛、はるばる下つて参りました。何でもやります。言いつけて下さいまし。

左七 あんたねエ、誰も面倒見るなんて言っていないですよ。お引き取り下さい。

与七 ごつつあんです。

左七 それは閑取り。

与七 ええつつ込みや。

重三 いいじゃねえか。置いてやれよ。

左七 旦那様……

重三 しみつたれたこと言うんじゃねえよ。この程度のお咎めがなんだつて

んだ。こんなことで、挫ける蔦屋じゃねえぞ……心配すんな。でえじようぶだ。心配いらねえ、この俺はでえじようぶだ！

そしてお篠を見る。

左七 何が大丈夫なんですか。だいたいどこ見て言つてンすか、旦那……

お篠はそれを聞き届けて去る。

そこに京伝とお菊がやって来る。

重三 おう伝蔵、よく来てくれたなア。元気そうで何よりだ。あんなことに

負ける俺たちじゃねえもんな。こつから巻き返しだ、巻き返し！ お

い左七、お茶だ……いや、酒にしよう。お菊ちゃんも、ね……

お菊 あんた、早く言つちまいな。

重三 どした？

京伝 実は……今度、銀座で始めた煙草屋、評判いいんだよ。

重三 そうか、そりやよかった。

お菊 そう言うこつちやないでしょ。

京伝 だつてよオ……

お菊 もう、じれつたいねエ……蔦重さん、これはとつても言いにくいことなんですけどねエ……これ以上、この人のこと担ぎ出そうとするのはやめて下さいまし。

重三 ……

お菊 今度のことで山東京伝は死んだことにして下さい。

与七 (突然) えつ、それじゃこの人が、かの京伝大先生だっか。感激や……

……京伝先生の御高名はその名の通り、京に伝わるだけやのうて、今や

大坂でも鳴り響いてまつせ。

京伝 あ、そ、そう？

与七 次回作の御予定は。

京伝 次のねエ、そうねエ……

左七 この前のは風俗のためによくなくから駄目だと言うのだから、今度は風俗のためによろしいものを書けばいいんです。

与七 わては旅行記がお勧めですワ。東海道の旅の様子を……

京伝 馬鹿野郎、戯作なんてのは世の中おちよくってナンボなんだ。為になるもの書くぐらいなら、俺はいつそ坊主になるぜ。

お菊 (怒って) 何言ってるんの、あんたは煙草屋になるんです！ お願いだ

京伝 から、この人をおだてるのはもうやめてちょうだい。そんなふうにおだてられて、調子に乗って、挙げ句の果てにこの人がどんなひどい目に遭わされちまったか……この手鎖の痕、見て下さいよ。ほら！
いてて……痛えよ、馬鹿。

と紫色に腫れている伝蔵の腕を見せる。

お菊 お医者様の話じゃ、あと十日、手鎖がハマってたら、この両手とも腐

って千切れたそうですよ。金輪際、この手に筆は握らせません。あんたがどうしても筆握るって言うなら、私は出刃であんたのこの手を叩き切って、その後、自分の喉突いて死にます。

京伝 お菊……

お菊 せっかく吉原出て、あんたと一緒になれたのに……私は貧乏でもいいんだ。ただ好きな人と一緒に居たいの。好きな人と一緒に笑って、一緒に泣きたい。ただ、それだけが願いなよ……

と泣き崩れる。

京伝 何が辛えって、自分が一生懸命書いた本がさ、目の前で破いて捨てら

れちまうんだよ。版木と一緒に火にくべて燃やされるんだよ。誰だつてさア、自分の子供が目の前で鬻り殺しにされりや、気が狂いそうになるだろ。でも、それを黙って見てなきやならねエんだ……あれはこたえた。心底こたえたよ……(手について) すまねエ兄貴、わかってくれ。

重三 いいよ、伝蔵、ゆっくり休め……俺なら、まだでえじようぶだ。なに、

取り締まりが厳しくなったと言つても、そら読み物の話だ。錦絵は許されてる。

左七 はい「一枚絵の類は、絵のみに候はば、大概是苦しからず」というのが公儀のお達しです。

重三 大概是苦しからずだ。

そこに西村屋がやって来る。

西村屋 葛屋さんいるかい……ああ、京伝先生、五十日の手鎖、まことにござい様でございました……

重三 どうしました、西村屋さん？

西村屋 大変だよ、また新しい町触れが出た。（と町触れの書を見せる）

一同、覗き込む。

初鹿野が現れて、

初鹿野 錦絵に女を描きても、女の名を書き添えること相成らぬ。また風俗の為に好からぬ姿を写すは一切御法度。色重ねについては、当面七色を限りとし、版木の数も二、三枚に留め、くれぐれも華美に相成らぬよう心がけること……

重三 俺たちの使う色の数にまで、口出ししようつてのか。

左七 今までの歌麿の絵の半分の手間ですよ……

西村屋 これじゃとても錦絵にならないよ。笑わせる読み物もダメ、綺麗な絵もダメ！ お奉行様は私らを殺すおつもりか……

京伝 兄貴……

重三 殺されてたまるかよ……こんなところで、死んでたまるか……

重三は町触れを睨み付ける。

春町と初鹿野。

初鹿野 「世の中に蚊ほどうるさきものはなし、文武と云うて夜も眠れず」町に流行る落首だ。詠み人知らずとされてはいるが、これほど見事に公儀の文武奨励を茶化すことが出来るのは、蜀山人、太田南畝以外におらぬ。狸爺イめ……まったくお前らは、心に思うことを、そのまま心に留め置くということが出来ぬのか。

春町 私が書いたものがいけないと言うのなら、私は他の仲間たちのようにどんなお咎めも受ける覚悟はできています。どうぞ、お好きなようにして下さい。

初鹿野 手鎖を受けて、世間の晒し者になるか。

春町 仕方ありません。

初鹿野 (声を上げて) なん。そんなことはこの俺が絶対に許さん。

春町 しかし、蔦屋や京伝がお咎めを受けて、私だけ逃げるわけにはいきません。

初鹿野 死ね。

春町 ……

初鹿野 お前は武士だ。あいつらとは違う。生きて辱しめを受けるぐらいなら、潔く腹を切れ。

問。

春町 そうですか、やっぱり死ななきやいけませんか……

安女郎屋の座敷。

重三はここに居続けている歌麿を訪ねてきている。

薄汚く狭い部屋の中で、歌麿は妖艶な遊女玉虫をより墮落させたような地獄女、舟虫を前にして、その姿を絵に写し取っている。

すぐそばでその筆さばきをじっと覗き込んでいるのは鉄蔵である。

重三

耕書堂の命運がかかっているんだ。ここで巻き返さねえと、うちは本当に潰れちまう。そのためには二流や新人じゃダメだ。歌麿しかいねえ……

しかし歌麿は黙って酒を飲み、筆を走らせている。と、いきなり鉄蔵を殴りつけて、

歌麿

馬鹿野郎、影になっちまうだろ。邪魔すんじゃねえ。

けれど鉄蔵は蹴られても、殴られてもその側から離れようとはしない。

重三は少し気圧されて、

重三

鉄蔵、お前、ずっとここにいるのか。

鉄蔵

はい、今は絵師を志しております。歌麿先生にお教えを乞い、お側に付かせて頂いております。

歌麿
鉄蔵

馬鹿野郎、人に教わるぐらいなら、絵なんてやめちめえ。はい。

そして歌麿は一心に描く。重三は唾然とするばかりだが、

重三

なア勇助、助けると思っただけを貸してくれ。

歌麿

俺に何を描けというんだ？

重三

歌麿は美人画に決まってるだろ。

歌麿

出せるのかよ、錦絵が？ どの美人描いて、どの大ききで、何色で摺るつもりだ？

重三

お咎めなら心配いらねえ。俺は命張ってお前を守る。こんな場末で汚

え女描いてねえで。大店の奥座敷を用意するぜ。

舟虫　なんだって、もう一度言ってみな。あたしに何か文句があんのかい。

歌麿　(すごい剣幕で)遊んでんじゃねえんだ。動くな。

舟虫　あたしを絵にしたいんなら、お銭を出しな。

歌麿　うるせえ黙れっ！　まったくこいつらドブ川岸の鉄砲女郎は男に騙

されたことしかねえもんだから、顔が暗くてしようがねえ。鉄蔵、こ

いつを抱いてやれ。こんな女でも抱かれりゃ、色気も出すだろ。早く

やれ、鉄蔵。

……

歌麿の絵が見たくねえのか！

鉄蔵　は、はい。

鉄蔵は舟虫を強引に押し倒す。

重三　おい、勇助、お前、いったいどうしちまったんだよ。

歌麿は黙って筆を走らせている。重三は歌麿の前に座り直して、

重三　お前、怖いんだろ……やっぱり逃げて来たんだな。公儀のお咎めが怖

くて、こんなところに入り浸ってんだろ。

歌麿　邪魔だよ、どけよ。

重三　俺がこんなに頼んでんだぞ。俺とお前は今まで一心同体だったじゃね
エか。

重三は鉄蔵と舟虫を強引に引き離す。

歌麿　何しやがんだ！

重三　やめろ！　こんなのは歌麿じゃねえ。歌麿は春画描かせたって、こん

な無神経な絵は描かなかったぞ。歌麿ってのは……俺とお前で作って

きた歌麿ってのは、もつと綺麗で、繊細で、だけどその奥に青白い命

の炎が燃えてるような……俺たちが作り上げた歌麿はいったいどこ

に行っちゃったんだよ。

歌麿　俺が殺したよ。

重三　ど、どう言うことだ。おい勇助、歌麿ってのは、お前だけのもんじゃ

ねえぞ。俺とお前、二人で力合わせて、必死に育ててきたんじゃねえ

か。それをお前、殺したってのはどう言うことだ。

歌麿 あいつには、今のこの世を生き抜いていく力はねエ。だから、俺がこの手で殺した。いいか、歌麿ってのはな、もつと凄え奴じゃなきゃいけねえんだよ。

重三 だから、二人で巻き返そうってンじゃねえか。そら、公儀のお達しを破る訳にはいかねえ。けど、許されたなかでギリギリの勝負をかけるんだ。他の版元は、みんな怯えて、錦絵は控えてる。今、出せば、それだけで目立つ。たとえ小さくても、色数が寂しくても。

歌麿 それで世間の奴らを驚かすことが出来るのか！ そんな半端で。歌麿はやっぱりすげえと言わせることが出来るのか？ おめえはこの歌麿に、歌麿の真似をしろってのか！

そして歌麿は部屋を出て行く。船虫も後に続いて去る。

鉄蔵 あの人は、今まで描いた絵を自分で破り捨てているんです。必死になつて今までの自分を壊そうとしているんです。それがなぜなのか俺にはわかりません。でも、ヤケになつてそんなことしようとしているんじゃないと思います。たぶんあの人は生まれ変わろうとしているんだと思います。その証拠に、あの人は浴びるように酒を飲んでいますが、絵筆を持つ手が震えるようなことは絶対にはないんです。

重三はじつと黙っている。

鉄蔵 一つだけ教えて下さい。俺にはまだよくわかりません。

重三 ……
鉄蔵 絵なんてものが、この世に本当に必要なんでしょうか。そこまで苦しんで、それでも描かなきゃいけないものなんでしょうか。

重三 わからねエよ。俺にもわからねエ。
鉄蔵 俺は……俺は怖くて仕方ないんです。絵が描きたいんだけど、心の底から描きたいと思うんだけど、そこまで自分を追いつめるなんて、怖くて仕方ないんです。

重三 ……
鉄蔵 でも……本当にいい絵が描けるのなら、もしこの手にその力が宿るのなら、自分なんか壊れちまっても構わないような気もして……だから余計に怖いんです。

鉄蔵は去る。

重三は一人、座敷に取り残される。

重三の目の前に、白無垢の袴を付けた春町が現れる。
刀を抜いた初鹿野がその傍らに立つ。

重三
……

初鹿野は刀を大きく振り上げる。
春町はふいに短刀を置いて、

春町 なぜ私が死ななければならぬのでしょねエ。
初鹿野 それは貴様が武士だからだ。さア、倉橋。見事に腹を切ってみせてくれ。

しかし春町はもう刀をとろうとはせず、

春町 どうぞそのままこの首をお斬り下さい。好き勝手にやってきて、死ぬ時だけ見事じゃ申し訳ない。

初鹿野 倉橋、貴様はそれでも武士か。貴様には誇りが無いのか。

春町 私は刀を持っていることよりも、筆を持っていることの方が多かったものですから……

初鹿野 武士であることよりも、戯作者であることに誇りを持っていると言うのか。

春町は初鹿野に微笑みかける。

初鹿野 なにおかしい。

春町 第一、私は切腹の仕方をよく知りません。

そして春町は笑う。

初鹿野 お前はまたそうやって笑うのか。なぜ笑う。何がおかしくて、そんなに笑うんだ。俺がそんなに阿呆に見えるか。

しかし春町はまだ笑っている。

初鹿野 やめろ。笑うな！ 俺はお前たちのその、人を小馬鹿にしたような笑

い声が我慢できないのだ。世の中を斜めから見ても、嘲笑うその態度に腹が立つんだ。やめろ。何がおかしい！

春町 私たちは別にあなたを笑ってるわけでもないし、公儀を笑ってるわけでもありませんよ。私たちはただ、自分で自分を笑っているんです。誰でもない自分のことを、なんて無器用で不自由な、しゃらくせえ馬鹿どもだらうって。

初鹿野

……

春町 笑ってみればよかったんだな。あなたも一度、私たちと一緒に腹の底から笑ってみればよかったんだ。

間。

春町

さア、どうぞ。

と春町は首を差し出すが、今度は初鹿野が思い切れない。すると春町はついに刀をとって、

春町

（重三に）なあ、兄弟たち。お前たちは、自分のためだけに命を使えよ。

春町は腹を切り、初鹿野の刀はついに振り下ろされる。

重三

せ、先生っ！

焚書の炎が激しく燃え上がる。

黒衣たちも悲鳴を上げて、泣き崩れる。

冬。

初鹿野の妾宅。

お篠が一人で座敷に座っていると、戸口で音がする。

お篠 誰なの。旦那さまですか。

戸を開けてみると、そこには重三が立っている。

二人、しばらく沈黙のまま見つめ合っているが、

お篠 すぐに女中が戻ってきます。だから、お帰り下さい。

重三 すまねエ、すぐに帰るよ。ただ……お前の顔が見たくなっただけだ。

お篠 ……

重三 みんないなくなっちゃったよ……みんな、みんな、ばらばらだ。

お篠 ……

重三 また、ひとりつきりだ……お篠っ。

とその肩に手をかけるが、

お篠 やめて下さい。

重三 お篠！

お篠 私に触らないで下さい。私はもう女郎じゃないんです。

重三 ……

お篠 そりゃここが吉原で、私が女郎なら、どんな愚痴だって、泣き言だって、黙って聞いてあげられますよ。あなたの望む通りに慰めてあげると、冷えた心も暖めてあげられます。でもね、私はもう違うんです。泣くなら他所へ行つて泣いて下さい。

重三 ……

お篠 でもね、重三さん。私は女郎だったからよくわかるんですけどね、弱い者同士がどんなに慰め合ったって、どんなに暖め合ったって、そんなことで傷は塞がりやしませんよ。どんなに優しい人だって、女郎の本当の哀しさはわからないし、どんなに心のある女郎だって、お客さんの本当の淋しさなんかわかりやしないんです。だって人間なんて、もともと誰もがひとりつきりなんですから。

重三 ……

お篠 でも、ひとりつきりだからって、それが何だって言うんですか。そん

なこと悲しがつて、いったいどうやって生きて行けって言うんですか。ひとりつきりなら、ひとりつきりで何とかして、生きて行くしかないじゃない。そう私に教えてくれたのは重三さん、あなたでしよう。顔を見に来た、つて……笑わせないで下さいよ。私の顔を見てどうしようってんです。ああ、ここにも一人きりで泣いてる奴がいるって、確かめて安心したいんですか。こいつなら、どんなに酷い傷口も尻尾振りながら嘗めてくれるなんて思ったんですか。女にわざわざ泣き顔見せに来たりして、あなたには意地つてもんがないんですか。帰って下さい。そして、もう二度とここには来ないで。

重三は黙って出て行く。お篠はその場に崩れ落ちて、
間。すると、

春町 どうしたんだい？

あの時のように春町が現われる。

お篠 先生……私、もうわかりません。私、いったいどうしたらいいんですか。

春町 いいんだよ。それでいいんだ……今度はいいつが門をくぐって吉原を出る番だよ。ちょうどあの時のお前さんがそうだったようにさ。自分一人の力で何かを探しに行くんだよ。巣を飛び立った、若鳥のようにさ……大丈夫だ。あいつは必ず一人で、大空を飛んでみせてくれるさ。

間。

お篠 今日は冷えますね……重三さん、風邪ひかなければいいけど。

春町 おや、そうかい。私はちっとも寒くないけど……やっぱり死んじまつたせいかな。

そこに初鹿野がやって来る。

初鹿野 お篠、帰りましたよ。

お篠 お帰りなさいまし。旦那様。

初鹿野 今夜は冷えるよ、しーちゃん……おお、寒、寒……（とお篠の手を握る）

お篠 先生も、今夜はゆっくりしてって下さいな。（とお篠はもう片方の手

で、春町の手を握る)

初鹿野 もちろん、ゆっくりしていきますよ……ねえ、ずっとここにいます。

春町 はい、ずっといましょう。

お篠 はい、ずっと。

お篠と春町は微笑み合っている。

新吉原大門。

冬の夜。

黒塗りの大門に枯れ枝。

遊客たちも寝静まり、深閑とした闇が拡がっている。

重三はやつぱりここに戻って来てしまった。

重三

俺は結局、ここに戻ってきちまうのか……

重三は門の前で立ち尽くすが、やがて、

重三

これが葛屋重三郎か……俺はこんな男になりたかったのか……ふざけるんじゃないぞ、こん、畜生っ！

重三は突然、羽織を脱ぎ、裸足になって、大門によじ登り始める。そして必死に大門にしがみついで、

重三

なんで俺がこんなところでへたばんなきゃなんねえんだよ。俺を見くびんじゃないぞ、馬鹿野郎。俺を誰だと思ってるやがんだよ。葛屋重三郎だぞ。俺の店の商標をよく見てみる。富士山形に葛の葉だ。俺は日本一の富士のお山にからまりついてる葛の葉なんだよ。切っても切ってもからまって絶対離れやしねえんだよ。そう簡単にくたばってたまるかよ。死ぬ時は富士山道連れにして死んでやるぜ。俺にはなア、怖いものなんか何んにもねえんだ。たいした学もねえ家柄もねえよ。この吉原で生まれて、親父の顔も知らずに育った、どうでもいいような男なんだよ。俺は何んにも知らねえし、この手に何も持っちゃいねえ。絵も描けなきゃ、筆だって立ちやしねえぞ……どうだ！ こんだけ見事に何んにもなくて、こんだけ成り上がった男が他にいるかってんだ。木下藤吉郎だって、まさか吉原で生まれちゃいねえだろ。俺はもともと裸一貫だ。失くして困るもんが、どこにもねえや。欲しけりや全部くれてやるぜ。半分なんてケチくせえこと言ってるねえで、残らず全部持って行きやがれ！ けどなア……これだけは言っとくぜ。何持ってるも構わねえけど、この俺は必ずまた新しいものを見つけて出してみせるからな。今までだって俺はこの目で京伝や歌麿を見つけて出してきたんだ。この目ん玉が開いている限り、俺は不死身だ。よく見てろよ、こん畜生っ！

重三は大門のてっぺんまで登って、吉原の町を見下ろす。

重三　なんだよ、どいつもこいつも寝てやがんのか……

重三はまるで町に語りかけるように、

重三　おいテメエら……そんなところで呑気に寝てる場合じゃねエぞ。テメエらがよだれ垂らして夢見てる間に、この門の外じゃ、いったい何が起きてると思ってるやがんだ……火事だぞ。大火事だぞ。この江戸中に火がついて、そこら中で燃え上がってるんだ。いろんな物が焼かれてんだよ。本も、絵も、人間まで……このままじゃ、一つ残らず全部灰になっちゃうぞ。テメエらが目を覚ます頃には、この江戸は一面焼け野原になっちゃうてるぞ……

突然、重三は声を上げて、

重三　起きろ！　起きろい！　いい加減に目を覚まさねエか、馬鹿野郎。寝てる間に灰にされちまってもいいのかよ。何も知らねエで、おとなしくこの世から消えてっちゃうつもりかよ。

その時、大門の向こうに拡がる闇の中に、数名の人影が浮かび上がって見えてくる。

それは名もなき彫り師や摺り師たち（黒衣たち）である。

重三　おめえたちは……

黒衣一　私たちは寝ちゃいません……

黒衣二　俺たちは何も知らずに、寝てるように見えるでしょうけど……

黒衣三　眠れません。

黒衣四　眠れません。

黒衣五　この目を閉じてても眠れません……

黒衣六　大火事です。

黒衣七　はい、この心が大火事です。

黒衣八　真っ暗にしか見えないでしょうが。

黒衣九　この暗闇の中で、心がぼうぼう燃えてるんです。

黒衣たちは初めて顔を覆っている黒布を外す。その下には鋭

い目が光っている。
それを見て、

重三 錦絵を出そう。とびきりの錦絵をこしらえて、俺たちの凄さを、公儀や世間の奴らに思い知らせてやろう。

黒衣たち 蔦重さん。

重三 男の絵を出そうじゃねえか。女の絵がいけねえなら、男の絵だよ。この江戸には吉原の女以上に、派手で色っぽい男たちがいるじゃねえかよ。役者だ、役者……役者絵を出そうぜ。そもそも歌舞伎だって、もとは女が演じてたのが、野暮な公儀に取り締まられて、男だけでやることになったんだ。けど、それを逆手に取って、本物の女以上に、綺麗で粋な女方を創り上げた。同じ事を俺たちは錦絵でやってやろうじゃねえか。

黒衣たち (口々に) やりやしよう。

重三 役者たちの顔を一面に描いた大判の大首絵だ。それをきらら摺りにする。

黒衣たち きらら摺り。

重三 使える色が限られてる以上、背景は一色摺りにするしかねえ。だがベタ摺りじゃ、味も色気もねえ。きらら摺りなら、細かい雲母が背景でキラキラ光って深みが出ら。闇の中に、静かに光る、心の炎だ……公儀の野暮を、俺たちの粋に変えてやるんだよ。

いつの間にか彫達と摺松もいる。

そして顔を隠した数名の者たちも。

その背格好はそれぞれに見覚えがあるような……

顔を隠した男の一人が口を開く。

謎の男

まったくな……しやらくせえ。

やがて背景に浮かび上がる写楽の大首絵。

写楽絵発表直後の耕書堂。

南畝が写楽の絵をじっと見ている。

左七と与七も側にいる。

南畝 確かに、世間の奴はびっくりしてるけど、売れてるのか？

与七 ぼちぼちでんな……

左七 これはまだ序幕ですから。

南畝 序幕って、この上にまだ出すのか？

左七 今回が二十八枚。第二幕、第三幕と続けてあと五十枚ほど。

与七 よう見て下さい。今回は脇役が中心でつしやる？ 大物が後に控えてるんですわ。

南畝 あとも全部、大首絵か？

与七 もちろん、きららで。

重三が現れる。

重三 ああ先生、いらっしやい。いい感じだぞ、町の奴らは写楽にたまげやがるぜ。

南畝 そらたまげるよ。このご時世に、しかも、こんなに遠慮なく好き勝手に役者を描いちまって。

与七 さつきも、成田屋のご鬘筋が、偉い剣幕で文句言いに来りましたわ。

重三 いいじゃねえか、騒げ騒げ。序幕は騒ぎが起きるが一番だ。喧嘩と笑いで盛り上がれ。でもいいか、次の幕じゃ客の心をちよいと打って、一気にこつちに惹きつける。大詰めで拍手喝采。お代は見てのお帰りのよ。

左七 今はただ目立って話題になればいいんです。売れるのは大詰めで。

南畝 それで、東洲齋写楽つてのは誰なんだ？ この筆さばきにどこか覚えがあるような、ねえような……

重三 先生もなつて下さいますか？ 写楽に？

南畝 え？

重三 先生も俺たちの仲間ですから。

と、そこに……

富三郎 ご免なさいよ。ちよいと、東洲齋写楽先生はいらっしやるかしら。
市松 いらっしやるかしら。

写楽に描かれた女方、中山富三郎と佐野川市松である。

重三 写楽絵の版元、蔦屋重三郎でございます。

富三郎 そうですか。どうも……今度の錦絵、拝見させて頂きました。ずい分と大きく描いて頂いて……

市松 描いて頂いて。

富三郎 でも、写楽先生は、じかに舞台を御覧になつてはいないみたいですね。

重三 いいえ、写楽は毎日、芝居小屋に通っております。その名の通り、描き写すことを喜びにして。

富三郎 それじゃなんですか。私があんな柿の種みたいな目してるって言うんですか。

市松 なすびみたいなの顔してるって言うんですか！

南畝らは写楽の絵を見て、

南畝 中山富三郎と佐野川市松か。なるほどよく描けてるよ。

富三郎 私があんな顔してるってんですか。

南畝 こんな顔だ……

重三 写楽の目には、あの絵のように見えたのでしよう。

富三郎 見えた……そりやいったいどういう意味ですか。冗談じゃありませんよ。私があんなひしゃげた顔しちやいません。写楽ってのは盲かい。

私は舞台に咲く一輪の百合とまで言われる立女方ですよ。

市松 私はかきつばた、ですよ。

二人 馬鹿にしないで。

富三郎 だいたいねエ、役者は顔が命です。それをあんなふうは無神経に……

重三 そりや私は、芝居は素人ですが、一言言わせて頂けるなら、顔が命の芝居より、芸が命の芝居を見せて頂きてエなア。

南畝 よう、蔦屋。

市松 違います。役者は顔よ！ 顔、顔、顔！

二人 ねーっ。

富三郎 とにかく写楽出しなさい！ 写楽はどこだ、写楽、出て来い！

するとまず左七と与七が現れる。

左七・与七　私が写楽でございます。

富三郎　何さ！

左七　誰よりも芝居に通じた、滝沢馬琴が正体です！

与七　いい私でございます！　大坂から来た謎の物書き、十返舎一九でございます！

男　しばらくしばらくしばらく！（と現れ）写楽は私、「なんでもよし」でござりまする！

市松　ふざけるな！

富三郎　あんたは煙草屋の京伝じゃないか！

京伝　その通り、まことの写楽の正体は……うたまる、でござりまする！

富三郎　やっぱりそうか！

市松　私もあいつが怪しいと、思ってたのよ！

しかし出囃子とともに現れたのは、落語家の桂歌丸だった。

富三郎　もう、いい！

市松　何さ、みんなで人のこと馬鹿にして！

富三郎　いきましょ、いきましょ！

二人　とつとつ、楽屋に、帰りましょう！

富三郎と市松は去る。

与七・左七　騒げ、騒げ！

一同、笑い合う。

京伝　文句垂れてンのも今だけさ。そのうちに、世間が写楽を面白がり始めたら、手のひら返してゴマを擦り出すだろうぜ。この江戸で写楽の右に出る奴はいねえ！　江戸一番の写楽に描いて貰ったことをありがたく思いやがれ！

そこにお篠が駆け付けてくる。

重三　お篠じゃねえか……どうした？

お篠　重三さん、写楽をおやめ下さい……これ以上、写楽を出してはいけません。

重三　何だよ？

お篠 ご老中様と旦那様のご密談を聞いてしまったんです。公儀は次の機会を待って、蔦屋をお取り潰しになさるおつもりです。

重三 何だって……写楽は、何もお達しに触れちゃいねえぜ。許された範囲の中で摺り上げてンだ。

お篠 見せしめの為にです。重三さんが目立ち過ぎてから。騙し討ちのようにして、叩くつもりなんです。この耳で聞いてしまいました。今度、大判のきらが出たら、それが蔦屋の最後になると。写楽の正体も暴いてやると。

重三 そんなこと言ったって、これはまだ序幕だ。ここでやめたら、元も子もなくなっちゃう……

お篠 でも、このまま続けたら命を取られます。重三さんが殺されちゃう……ここに来たことが知れたら、私もお手討ちにされるでしょう。でも、どうしても重三さんをお助けしたくて。私には、あなたが……あなたが……重三さん、後生だから写楽は終わりにして下さい。この通りです……この通りです……

一同、押し黙る。

黒衣たち、嘆き崩れる。

重三 汚え手を使いやがるぜ……そう来るなら、俺にだって覚悟はあるぜ……侍が何様だ。公儀がそんなに偉えのかよ。人間に上等も並もあるか。同じような顔じゃねえか。とどのつまりは目鼻と口と……どいつもみんなおかしな面だぜ。それがテメエの面をよく見もしねエで、自分だけは上等だなんて思っちゃ奴がいるから、世の中おかしくなっちゃうんだ。テメエの面をよく見てみる、それが、人様差し置いて、偉そうなこと言えるような面か。こんちくしょう！ この心の奥に燃えている、俺たちの炎の熱さ、てめえらに教えてやるぜ！

ある寺の参道。

十一代將軍家斉の乗る豪華な籠の一行が行く。

その周りを密かに取り巻く黒衣たち。

その姿は侍たちには見えないらしい。

黒衣の中の一人が合図をすると、黒衣たちは一斉に蝶を飛ばし始める。

それは黒衣が操る差し金の蝶々たちの、美しい反乱だ。

役侍たちは刀を抜いて蝶たちを追うが、嘲笑うように蝶たちは舞い乱れる。

やがて、中央に守られた美しい籠の中から、將軍家斉が顔を出す。

その時を待っていたかのように、大きな布に姿を隠した謎の絵師が、紙と絵筆を持って、その將軍の顔を描き取り始める。

將軍の顔を描くのだ。

將軍の側に付く初鹿野がそれに気づく。

初鹿野……

初鹿野は、刀を抜いて蝶を斬つてゆく。

次々に倒れてゆく、蝶すなわち、黒衣たち。

やがて蝶はすべて斬り捨てられ、初鹿野はついに謀反人を追いつめる。

刀を振り上げ、斬りかかろうとすると、紋付羽織姿の重三が現れる。

重三は一枚の絵を高く掲げている。

思わず怯む、初鹿野。

重三

日本橋耕書堂、版元蔦屋重三郎、此の度、目出度く本願叶い、かねてよりの仇敵、十一代將軍家斉が首、討ち取りて候。この生首を早々に、きらら摺りの大判錦絵に仕立て上げ、江戸中の御最上方のお目にかけて進ぜましよう。まず、とくとご覧下さりませ！ これなるが真正正銘、稀代の江戸絵師、東洲斎写楽が写せし、公儀の顔でございます！

気が付けば、そこは大門前。
そして春。

黒塗りの大門に満開の桜。

將軍の首絵を掲げて、重三が仁王立ちしている。

周囲には、すべての人々。

初鹿野が重三の前に進み出る。

そして刀を抜く。

すると、お篠がその初鹿野に縋り付く。

お篠 旦那様、お待ち下さい……お待ち下さい……

初鹿野 だけ。

お篠 いいえ、どきません。この人を斬るのなら、まずは私をお切り下さい。
この人のお命ばかりは……お命ばかりは……

南畝も進み出て、重三の前に立つ。

南畝 それは本気か？

重三 ……

南畝 そんなことをすれば、お前の首が飛ぶだけでなく、江戸中の……いや、
日本中の版元、絵師、戯作者……私たちの仲間たちすべてが、今より
ももっと辛い思いをすることになるだろう。お前は本気でそうするつ
もりか？

皆、重三を見つめる。重三は身じろぎもせず、じっとしてい
る。初鹿野も刀を構えたまま動かない。

南畝は皆の方に向き直って、

南畝 いいか、これから先、この絵のことは、一切口にしてはならぬ。何か
に書き残してもならぬ。この絵のことは今日限り忘れるんだ。いいな。

皆、黙ってしまう。

しかし鉄蔵だけが進み出て、

鉄蔵 なぜだよ。なぜ忘れなきやなんねえんだよ。そこに描いてあるのは、
たかが人間の顔じゃねえか。人間の顔描いて、何がいけねえんだ。

南畝
鉄蔵

……
そりゃ俺たちは、殿様お抱えのお上品な絵師とは違って、絵筆を使って胡麻するような器用な真似は出来ねエ。でもなあ、身体張って描いてんだよ。筆だけ頼りに生きてんだ。誰にも文句言わせねエよ。

南畝

……

鉄蔵

俺たちはこの絵を世に残すべきじゃねエのか。たかが絵が、たった一枚の絵が、この世をひっくり返せるんだぜ！

歌麿

鉄蔵、もういい。終わりだよ。

鉄蔵

……

歌麿

たかが絵が、この世なんかひっくり返しちやいけねえよ。そんなのは絵じゃねえよ。絵ってのは……もつと良いもんだ。

重三はじつと黙っていたが、静かに微笑み、

重三

洒落だよ、洒落。笑ってくれよ……これは全部洒落なんだ。写楽なんて奴は、初めっからこの世にはいなかったんだよ。全部、洒落だ。

一同

……

重三

でもこの洒落は、とびきり面白かった。なあ、みんな？

京伝

洒落だよ、洒落！　なあ、兄弟たち……

与七

洒落や、洒落や！

左七

洒落です！　蔦屋の洒落です！　全部洒落です！

だが腹から笑いきることの出来ない、一同。

南畝が進み出て、気合いを込めて

南畝

東洲齋写楽……「あまりにまことを描かんとて、あらぬさまに描きなせしかば、長く世に行われず、一兩年にして止む」

そこに至って、初鹿野はようやく刀を収めてそこから立ち去る。

南畝も、ただ重三の目を見て、静かに去る。

鉄蔵は泣き伏している。

すると重三が、將軍の顔の絵を持って鉄蔵の前に立ち、

重三

どうしても忘れることが出来そうにねえか？

鉄蔵

はい。

重三

そうか。

重三は絵を鉄蔵に渡し、

重三 これを破いちませ。

鉄蔵 ……

重三 これの代わりをお前が描いてくれりゃいいんだ。これよりも凄え絵を、お前が描いてくれりゃいいんだよ。

鉄蔵 ……

重三 描けるか。お前にそれが描けるか。

鉄蔵はじつと重三を見ている。

重三 さア、今ここで、俺の目の前でそいつを破いて見せてくれ。

鉄蔵はその絵を破り始める。

その時、風が吹いて、満開の桜が乱れ散る。写楽の絵はその花吹雪に紛れてしまった。

斬り捨てられ、倒れていた黒衣たちも、再び蝶となって甦り、飛び去って行く。

京伝 久しぶりに、こうしてみんな揃ったんだ。吉原にパッと繰り出そうじやねえか！

お菊 何言っつんのよ、あんた！

京伝 馬鹿野郎、酒飲むだけだ！

一同、吉原に繰り出して行く。

そして桜の舞い散る中、重三とお篠だけが残る。

気が付くと、いつの間にか春町がそこにいる。

そして二人を見守っている。

重三 写楽の絵は持っててくれるか？

お篠 はい、全部。大好きですよ。滑稽で、美しくて、でも哀しい。ああ、これが人間だなんて……眺めながら笑って、気が付くと涙が出てる……

重三 お篠、ありがとうな。

お篠 ……

重三 達者でな。幸せになってくれ。

お篠 はい、重三さんも……

お篠は頭を下げ去ろうとする。

その時、春町が合図を送る。

黒衣たちが現れて、一齐に扇で風を巻き上げ始める。

美しく乱れ散る桜。

その中に一枚の写楽の絵が舞う。

その写楽絵を差し金で操っているのは春町である。

重三 おう、なんだ！

お篠 写楽の絵！

春町の操る写楽の絵は、二人の間に舞い落ちる。

二人はその絵に同時に手を伸ばす。

手が重なり合う。

思わず二人はその手を握り合う。

重三 一人じゃねえよ……ひとりきりだと思つて、歯を食いしばつて生きて

かなきゃなんねえ時はあるけど、そんな時でも一人じゃねえよ。

お篠 はい、一人でいても、一人じゃありませんでした。

重三 お前も写楽だ。覚えていてくれ。その名の中に、お前もいるんだ。お

前も写楽だ。

お篠 重三さん……

重三 一人きりじゃ、写楽は生まれなかったよ。

二人は、今一度、写楽を眺める。

そして微笑み合い、やがて静かに別れて去って行く。

舞い落ちる桜の中、春町が静かに笑つて二人を見送っている。